

沖縄八重山文化研究会会報

第 199 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
事務局 沖縄県立芸術大学付属
研究所 波照間永吉研究室
那覇市首里金城町三六
〇九八八八二五〇四三



第一九九回沖縄・八重山文化研究会（会長三木健）は、二〇〇九年三月十五日、県立芸大付属研究所内で開かれ、呉海燕氏が『中山世鑑』にみる中国古典の引用関係について」と題して発表した。呉さんは中国・黒龍江省出身。一九九八年に黒龍江大学の日本語学科を卒業したあと一九九年に来日。沖縄国際大学大学院地域文化研究科（修士課程）を経て、現在、沖縄県立芸術大学芸術文化研究科後期博士課程在学中。琉球における漢文化受容の文化史的研究を研究テーマとし、主な論文に『琉球国由来記』の編纂特性について、『琉球国由来記』との比較を通して、『沖縄文化』一〇一号、二〇〇六年、所収）がある。

『中山世鑑』にみる中国古典の

引用関係について

呉 海燕

1、『中山世鑑』の成立について
『中山世鑑』は、琉球最初の正史であり、一六五〇年に羽地朝秀（向象賢）によって

編纂された。後に、蔡鐸がこれを漢訳補訂した『中山世譜』が一七〇一年に成立し、俗に蔡鐸本とも言われる。一七二五年に、蔡鐸の子蔡温が父親の『中山世譜』をさらに改修し、蔡温本『中山世譜』の編纂を終えた。一七四五年、鄭秉哲らによる編年体の歴史書『球陽』が成立した。

『中山世鑑』の編纂者羽地朝秀は、沖縄歴史を代表する政治家の一人である。向象賢はその唐名で、俗に羽地王子朝秀、羽地按司朝秀とも呼ばれる。一六四〇年（一説では一六五二年）、二四歳で家督を継承し羽地間切の総地頭職に就き、一六六六年、五〇歳で摂政に就任した。摂政の任期中次々と施政方針を発表し、それらの施政方針をまとめた文書集は、有名な『羽地仕置』である。向象賢は国王の命を受け、『中山世鑑』を編纂したのは、彼が摂政になる十六年前、三四歳の時である。

2、『中山世鑑』の記述内容について
『中山世鑑』は全五巻よりなっている。本文の前にまず向象賢の書いた「琉球國中世鑑序」が掲げられ、次に、「琉球國中

山王舜天以来世續圖」、「先國王尚圖以来世系圖」と続き、その次に「琉球國中山王世繼總論」とあり、向象賢はここで琉球開闢から当時の尚質王までの各王代を概観している。本文第一巻は、「琉球開闢之事」と舜天王統の舜天王、舜馬舜熙王、義本王の紀である。第二巻は、英祖王統の英祖王、大成王、英慈王、玉城王、西威王と、察度王統の察度王、武寧王の紀である。第三巻は、第一尚氏王統の尚巴志王、尚忠王、尚思達王、尚金福王、尚泰久王、尚徳王の紀である。第四巻は、第二尚氏王統の開祖尚圖王と二代目の尚宣威王の紀である。第五巻は、第二尚氏王統第四代国王尚清王の紀である。内容的に第三代の尚真王代の記事が省かれていることで、史書として不完全であると指摘されているが、開闢神話と舜天の出身に関する記述は、後の史書に踏襲されている。

3、『中山世鑑』にみる中国古典の引用関係について

『中山世鑑』の記述は主に和文体であるが、漢文による記述も随所見られる。これらの多くは中国古典よりの引用である。以下、例を見ながら確認していく。

(1) 故事成語の引用

事例1：『中山世鑑』巻一

其後、天孫氏二十五世ノ御時、逆臣利勇ト云者有リ。(略)終二八、以鹿為馬ノ心

ヤ、出来タリケン。

『史記・秦始皇本紀第六』

八月己亥、趙高欲為亂。恐群臣不聽、乃先設驗、持鹿獻于二世、曰、馬也。二世笑曰、丞相誤邪。謂鹿為馬。問左右。左右或默、或言馬、以阿順趙高。或言鹿(者)。

高因陰中諸言鹿者以法。後群臣皆畏高。

傍線部の「以鹿為馬」は、よく「指鹿為馬」の形で使われ、趙高が鹿を馬といった故事から由来した成語である。この成語は人を試す目的で故意に誤りを言うことから人を欺き愚弄することという。また、間違ったことを強引に押し通すこと、白を黒と言いつ張ることにもいう。この例においては、利勇も趙高も、大権を握ったことで共通し、また、利勇は最終的に君を毒殺し、趙高も秦二世を自殺させた「逆臣」、「悪臣」という実質の共通性から、「以鹿為馬」という故事成語を選んだと思われる。

(2)「…云」や「…曰」の形で原典の文章を引用する

事例2：『中山世鑑』巻三

サレバ孟子云。

愛人不親。反其仁。治人不治。反其智。禮人不答。反其敬。行有不得者。皆反求諸己。其身正而。天下歸之。(以下略)

『孟子・離婁章句上』

孟子曰、愛人不親、反其仁。治人不治、反其智。禮人不答、反其敬。行有不得者、

皆反求諸己。其身正、而天下歸之。

『中山世鑑』の例は尚徳王の鬼界嶋征伐の記述に続くものである。鬼界嶋征伐は勝利を収めたが、後に続くのは凱旋の喜びではなく、孟子が説いた「自己反省」の必要性である。この傍線部は、「云」と「曰」の文字の違い以外に、すべて原典の文句そのまま引用している。孟子はここで、ひたすら自己反省の必要なことを切論している。特に「愛人不親、反其仁。治人不治、反其智」といい、「皆反求諸己」というなどは、最も孟子の人間道義的誠実さを提唱した名言である。

(3) 原典の文章を文中に挿入する

事例3：『中山世鑑』巻四

傳云、君視臣如手足、則臣視君如腹心。君視臣如土芥、則臣視君如寇讎ト云ヘリ。

『孟子・離婁章句下』

孟子告齊宣王曰、君之視臣如手足、則臣視君如腹心。君之視臣如犬馬、則臣視君如國人。君之視臣如土芥、則臣視君如寇讎。ここでは原典の出所を示していないが、典拠となっているのは、『孟子・離婁章句下』の文句で、孟子が齊の宣王に君臣関係を説いたものである。傍線部において、原典の二箇所の「之」が省かれているのを除き、すべてそのまま引用されている。但し原典にある「君之視臣如犬馬、則臣視君如國人」は、『中山世鑑』では省かれている。

文化短信

「名蔵白水の戦争遺跡群」「旧盛山村跡の御嶽」市文化財に指定

石垣市教育委員会文化課はこのほど、「名蔵白水の戦争遺跡群」と「旧盛山村跡の御嶽」を市指定文化財に指定した。市指定文化財は六六件となり、戦争関連の文化財指定は県内で八例目、市では登野城小奉安殿に次いで二例目となる。

名蔵白水の戦争遺跡群は、沖縄戦末期に日本軍の駐屯地、地元住民、官公庁の避難場所になった地域で、八重山支庁が設置した「八重山支庁壕」や「御真影奉壕」、日本軍が設けた井戸、塹壕跡、軍命によって避難した住民のカマド跡や塹壕が現在でも数多く残されている。戦争マリアの悲惨さを後世へ伝えていくためにも重要な地域となっている。

盛山村は一七八五年に富崎村から移転して創設されたが、マリアなどで一九一七年に廃村となった。同村周辺は現在、土地改良事業や新空港建設が進められ、八重山の歴史を知るうえで貴重な場所となっているため、保全が求められていた。

現するに決定的な戦いを記述したものである。その時戦い相手の中山王について、当時の状況を「四面皆、楚歌ス。」と表現している。「四面皆、楚歌ス。」の原典は『史記』の「四面皆楚歌」である。ここでは中山王の難境を項羽のそれにならえて同じ状況に置かれていることから「四面皆楚歌」を「四面皆、楚歌ス。」に、前後の和文体に合うように訳している。ちなみにこの項羽の故事から「四面楚歌」という成語も生まれたが、『中山世鑑』の「皆」からみると、やはり『史記』の原文を参考にしたと思われる。

4、まとめ

以上、『中山世鑑』の成立、内容および記事における中国古典の引用関係について見てきた。『中山世鑑』の中国古典の引用について、主に故事成語の引用、「…云」や「…曰」の形で原典の文章を引用する、原典の文章を文中に挿入する、原典の出来事や話を琉球の事例として記述する、原典を和文に訳して記述する、の五つに分類できる。このような中国古典からの引用は、『蔡鐸本』『中山世譜』、『蔡温本』『中山世譜』、『球陽』にも見られる。これからは、これらの文献における中国古典の引用について考察し、その特徴をまとめることによって、琉球における漢文化受容の一側面を明らかにしたいと思っている。

(4) 原典の出来事や話を、琉球の事例として記述する

事例4: 『中山世鑑』巻四

其世子尚徳、嗣テ立給ケルガ、資質甚敏、材力過人、手格猛獸。知足以距諫、言足以飾非。

『史記・殷本紀第三』

帝紂資辨捷疾、聞見甚敏、材力過人、手格猛獸。知足以距諫、言足以飾非、

『中山世鑑』は尚徳王についての描写であり、『史記』の傍線部は殷の紂王についての描写である。両者を比べてみると、波線部「資質」と「聞見」の違いを除けば、まったく同じ表現である。二人とも「暴君」という共通点から、『史記』における表現をそのまま『中山世鑑』の尚徳王項に移している。つまり、殷紂王のことを借用し、尚徳王のこととして記述している。

(5) 原典を和文に訳して記述する

事例5: 『中山世鑑』巻三

終二、山南王、義兵を擧給ケレバ、中山王、拒戦ントシ給ヘバ、勢微ニシテ、難叶。一先ゾ、落給ハントシ給ヘバ、四面皆、楚歌ス。

『史記・項羽本紀第七』

項王軍壁垓下。兵少食盡。漢軍及諸侯兵圍之數重。夜聞漢軍四面皆楚歌、項王乃大驚曰、漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。

『中山世鑑』は、尚巴志が三山統一を実

新刊紹介

石垣市史考古ビジュアル版3・4

石垣市の市史編集課では、二〇〇八年から「石垣市史考古ビジュアル版」(担当・島袋綾野)として、八重山の先史時代を視覚的にわかりやすくシリーズで刊行しているが、二〇〇九年三月そのシリーズの3、4が同時に刊行された。

3は『有土器から無土器へ』である。考古学の一般的な発展過程では「無土器から有土器へ」というのが常識であるが、八重山の場合、途中から逆転している。それが八重山の先史時代の大きな特徴となっている。八重山の考古学編年では、三三〇〇年〜四三〇〇年前は下田原式土器という土器を使用する人が住んでいた。八重山を代表する石垣島の大田原遺跡、西表島の仲間第二貝塚、波照間島の下田原貝塚などである。

ところが、その後二〇〇〇年ほどの空白期を経て、約一八〇〇年〜二〇〇〇年前から、今度は土器を持たない人々が住み始めている。それが一二世紀の初頭まで続く。その時代の人々の暮らしを紹介したのが3である。下田原期の遺跡が赤土の台地に多

かったのに対し、この期の遺跡は砂丘に形成されている。石垣島の崎枝赤崎貝塚、神田貝塚、竹富島のカイジ浜貝塚、西表島の仲間第一貝塚、波照間島の大泊浜貝塚など五一もの遺跡が見つかっている。これらの遺跡から、石製品や貝製品、骨製品それに末期には鉄器や中国産白磁、長崎産滑石製石鍋、徳之島産カムイヤキ、銭貨なども見つかっている。石斧や貝斧、焼き石調理の石などもあるが、中でもシャコガイ製の貝斧は宮古を南限とする南方系の先史文化で先島先史文化の大きな特徴の一つでもある。本編では有土器から無土器の逆転の契機となつた一九七八年の石垣島の大田原遺跡と神田貝塚の発掘調査について金武正紀が、西表の鹿川ウブドー遺跡について仲盛敦がかいている。巻末にはこの期にかかわる発掘調査の報告や、関連する論文を載せ、素人から専門に至るまで利用できるよう配慮されている。

4は『無土器から有土器へ 新里村期、新しい時代への幕開け』

先島の先史文化は、有土器の下田原期から土器を持たない無土器期を経て、新たな時代を迎える。それは自前の鍋の土器を保持した文化である。下田原以来の土器文化である。その時代を本巻では「新里村期」と呼んでいる。西暦十二世紀から十三世紀

の時代で、沖縄本島ではグスク時代の幕開けに相当する。

この名称は竹富島の新里村東遺跡で滑石製石鍋を模倣した土器(口縁に四つの縦耳を付けた平底の鍋)が発掘されたことにちなんで名付けられた。その設定の経緯について金武正紀は「無土器の時代が終わり、新たな土器文化が始まる。これは八重山における大きな文明開化でした。土器鍋を作ることにより、いろいろな食べ物を煮て食べる事が出来ます。食生活の幅が広くなり、生活に潤いが出たと考えられます。その意味において、滑石製石鍋の模倣土器の出現は八重山の人びとにとつて大きな節目であったのです」として無土器期とは区別され「新里村期」として、この期を設定したと書いている。この時期の遺跡としては、石垣島のピロースク遺跡、嘉良嶽東貝塚、竹富島の新里村東遺跡、カイジ村跡遺跡の四つが確認されており、本巻ではこれらの遺跡の出土品から、人々の生活の様子を紹介している。その中で北からの交流の痕跡が見られること、これまで見られなかった穀物の栽培が始まり、生活が大きく変化したことがある。やがて時代は、急激に人口が増え、フルスト原遺跡に代表される大集落形成の時代(中森期)へと進んでいくのである。

(石垣市、A3判、七〇頁、七〇〇円)